

カラフトマス 日本系

Pink Salmon, *Oncorhynchus gorbuscha*



管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)、日口漁業合同委員会

生物学的特性

- 最大体長・体重：尾叉長 70 cm・5 kg
- 寿命・成熟年齢：ほぼ全てが 2 歳
- 産卵期・産卵場：8～10 月、北海道北東部に流入する河川
- 索餌期・索餌場：夏期・北西太平洋
- 食性：水生昆虫（河川）、動物プランクトン・マイクロネクトン（海洋）
- 捕食者：鳥類・オショロコマ等魚類（幼魚）、ネズミザメ等大型魚類・オットセイ類等海産哺乳類（未成魚・成魚）

利用・用途

用途は広く、塩蔵品、生鮮、缶詰等がある。魚卵製品として、筋子（ます子）がある。

漁業の特徴

主に北海道北東部沿岸の産卵河川周辺で夏～秋季に定置網で漁獲される。広く北太平洋を回遊するが、北太平洋公海のさけ・ます漁業は禁止されている。他国 200 海里水域内での漁獲量は不明である。

漁獲の動向

1970 年代から沖合域での漁獲量は減少し、沿岸域の漁獲量が増加した。沿岸漁獲数は、1990 年代に急増し偶数年と奇数年の差も広がった。しかし近年、奇数年と偶数年で一定の豊凶が見られるものの、そのパターンの持続性は不明瞭になり、日本系カラフトマスは不安定な資源動向にある。2019 年漁期（7 月以降）の沿岸漁獲量は 1,442 トン（87 万尾）と著しい不漁となり、2020 年漁期の沿岸漁獲量（速報値）も 5,336 トン（400 万尾）と不漁が継続している。最近 5 年間（2015～2019 年）の沖合を含む漁獲量は 2,100～14,000 トンであった。

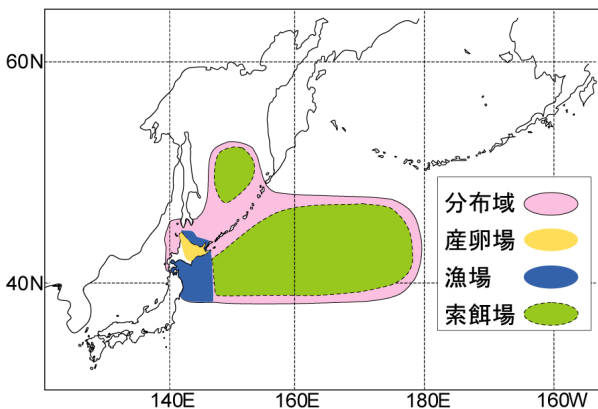
資源状態

稚魚放流数は 1980 年代から約 1.1 億～1.4 億尾で安定しているが、来遊漁獲数（沿岸漁獲＋河川捕獲）は、1970 年代後半～1980 年代前半の約 100 万尾から、1990 年代には 500 万尾以上となった。しかし、2009 年以降は、大きな変動を繰り返しながらも全体的には年々減少する傾向にある。前年 2019 年は過去 37 年間で最も低い漁獲量に陥り、2020 年は同一系群である前偶数年比で 68% であったことから、資源水準は低位であり、減少傾向にあると判断された。

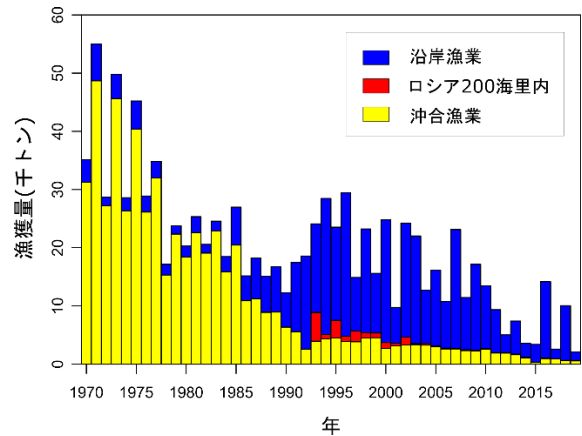
管理方策

繁殖期の降水量と冬期・春期の平均気温を説明変数として作成した再生産曲線を元に来遊漁獲数を予測し、以前の資源水準に回復できる河川遡上数を残り残すという、産卵親魚量一定方策による管理を提案した。今後は、沿岸域における漁獲利用率の調整及び河川捕獲された親魚のうちふ化放流に使用しない産卵親魚の再放流を行い、資源回復のために積極的に自然産卵魚を増加させる管理方策の導入を進める必要がある。

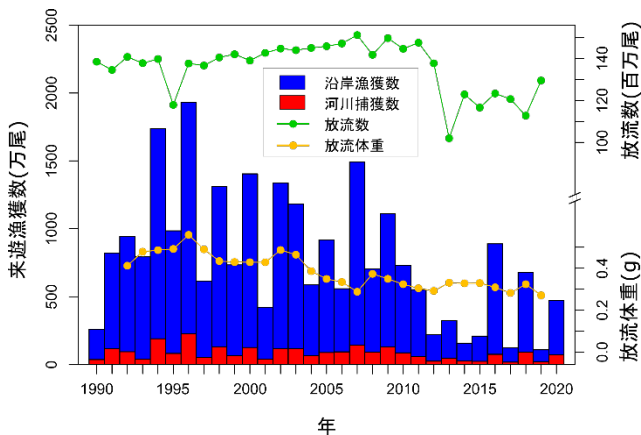
カラフトマス（日本系）の資源の現況（要約表）	
資源水準	低位
資源動向	減少
世界の漁獲量 (最近5年間)	35.4万～59.3万トン 最近(2019)年:52.5万トン 平均:47.7万トン(2015～2019年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	約2,100～14,000トン 最近(2019)年:2,088トン 平均:6,500トン(2015～2019年)
日本系カラフトマスの 我が国の沿岸漁獲量 (最近5年間)	約1,400～12,000トン 最近(2020)年:5,300トン 平均:5,800トン(2016～2020年)
管理目標	産卵親魚量一定方策 目標値:河川捕獲数1.0百万尾
資源評価の方法	沿岸漁獲数及び河川捕獲数により水準と動向を評価 再生産モデルによる解析
資源の状態	2020年の河川捕獲数/目標値=0.73
管理措置	・稚魚放流1.3億尾 ・幼魚・未成魚期・成魚期EEZ外、成魚期河川内禁漁
最新の資源評価年	2020年
次回の資源評価年	2021年



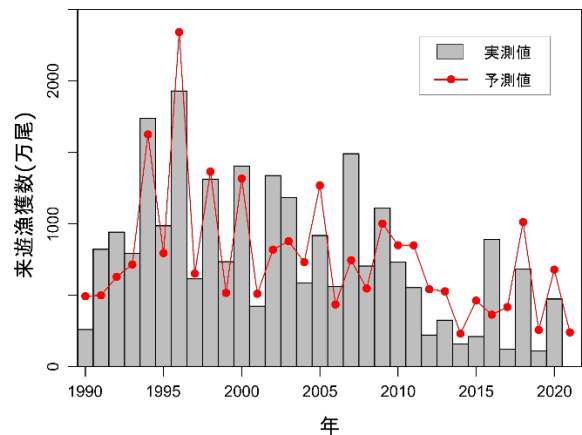
日本系カラフトマスの主たる分布域



日本の漁業におけるカラフトマスの漁獲量経年変化



日本系カラフトマスの来遊漁獲数、放流数及び放流体重の推移



日本系カラフトマスの来遊漁獲数の予測値と実測値の関係